

Surgical Intervention Strategy for Postoperative Chylothorax Following Lung Resection

メタデータ	言語: English 出版者: 公開日: 2015-03-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 内田, 真介 メールアドレス: 所属:
URL	https://jair.repo.nii.ac.jp/records/2001724

授与機関名 順天堂大学

学位記番号 甲第 1627 号

Surgical Intervention Strategy for Postoperative Chylothorax Following Lung Resection

(肺切除後の術後乳び胸に対する外科的治療戦略)

内田 真介 (うちだ しんすけ)

博士 (医学)

論文内容の要旨

乳び胸は肺切除後の重要な合併症の一つである。しかしその管理は施設間によって様々でありまだ統一されていない。乳び胸の中には保存的治療で軽快せず、再手術を余儀なくされる場合もある。今回当院における術後乳び胸の治療経過を調べ、再手術に至るべき症例の予測因子を検討した。2008年1月から2012年9月までに当院で手術を施行した原発性肺癌1,241例のうち、術後に乳び胸を発症した50例(4%)を対象とした。乳び胸の内訳は、男性:35例/女性:15例、年齢:中央値63歳(33-81歳)、右側:42例/左:8例、肺葉切除:42例(sleeve肺葉切除10例を含む)/肺全摘除:2例/二葉切除:5例/区域切除:1例、全例に二群郭清を施行、初回手術時予防的胸管結紮あり:21例/なし:29例、術後ドレナージ期間:中央値5.5日(5-14日)、術後在院日数:中央値9.5日(7-19日)であった。原則として術後第1病日の昼から一般常食を再開とし、乳び胸の診断後より脂質制限食(20g/日以下)とした。脂質制限食のみで軽快した症例は30例、胸膜癒着療法を施行した症例は11例、再手術を要した症例は9例であった。再手術まで要した日数は中央値5.5日(3-12日)であった。再手術後の合併症例や死亡例はなく、全例で乳び胸の改善を得た。再手術群9例および保存的治療群41例に分け、年齢、性別、病変の局在、術前併存疾患、初回手術術式、初回手術時予防的胸管結紮の有無、術直後からのドレーン排液量、周術期へパリン化の有無を比較検討項目とし、再手術を要する乳び胸の予測因子の検討を行った。結果、再手術群において術直後からのドレーン排液量 $448 \pm 189 \text{ml}/12\text{h}$ は、非再手術群の $298 \pm 117 \text{ml}/12\text{h}$ に比べ有意に多かった($p=0.003$)。多変量解析により、術直後からのドレーン排液量が多いことが再手術の予測因子となった($p=0.01$)。今までは、乳び胸と診断し食事再開後のドレーン排液量を観察した後に再手術を行っていたが、今回の検討から、すでに術直後のドレーン排液量が多い場合は、再手術を要する乳び胸である可能性があり、再手術を念頭においた管理が必要であると考えられた。